

## 八雲町立熊石第一中学校

実施日：平成23年11月25日（火）13:25～14:15

講師：桜井 和子氏（択捉島出身）

北方領土についてお話ししたいと思います。皆さんは北方領土については、知っていることと思いますが、北方領土というのは、日本固有の領土なんです。固有というのは、元からあったという意味で、後から与えられたものではないという意味です。位置としては、北海道本島の東北部にある島々で、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の島々からなっています。歴史的に見ても、江戸時代に正保御国絵図（しょうほうくにえず）という地図ができていたのですが、そのときも既に択捉、国後という名前は既に載っております。択捉島の岬に「大日本択捉」という標柱が建てられていて、日本の領土であるということを示しております。松前藩なども北方領土の警備に当たっていたりして、北方領土は祖先が厳しい環境の中で心血を注ぎ開拓をしてきた土地なのです。

北方領土には、キタキツネをはじめ、トド、オットセイ、アザラシなどたくさんの動物が棲んでおり、森林も豊富なところなのでヒグマも多数棲んでおりました。海も寒流と暖流がぶつかっているところなので、世界の三大漁場の一つと言われており、鮭、鱒はもちろんのこと、ウニ、ホタテ、昆布とか海苔など資源に恵まれておりました。私は小学校6年生までしか住んでおりませんが、自然が豊かで、缶詰工場があり、鯨も捕れましたから捕鯨場とか孵化場とか色々な施設もありましたし、ここではどんなことをしても食べていけるようなのだなと子供心に思っておりました。また、捕鯨場が家の近くにあったので、捕鯨船が鯨を捕ってくると、長い汽笛を3回ずつ鳴らして港に入ってくるのですが、村の人達は一齐に港に走って行って鯨の陸揚げを見に行きました。大きな鯨が引き揚げられてくると、鯨の解体をする人は、薙刀のように長い柄の先に50センチくらいの大きな刃をつけて解体を始めるんです。そうすると見に行っている人に「これ持って行って食べれ」と言って20センチ四方くらいの大きさの肉、脂の下の「すのこ」という霜降り肉を皆に分けてくれました。捕鯨場、缶詰工場、孵化場などの施設がありましたから、函館、青森、秋田など内地の方からもたくさんのお出稼ぎの人が来て、その頃は村の人口が何倍にも増えました。

生活は電気、ガス、水道もありませんので、今と較べると不自由な生活かもしれませんが、島の人達は仲良く、明るく、楽しく、平和に過ごしておりました。その頃の小学校の思い出と言いますと、一クラスしかなくて44人だったと思いますが、列で学年を分けていて右が1年生、真ん中が2年生、左が3年生、先生は、校長先生がすべてを兼務しており1人しかいません。そのような授業なので、1日に1時間しか教えてもらえませんでした。運動会などがあると隣村に応援に行きました。隣村までは、3里半。キロ数に換算すると14キロほどになりますが、隣村の運動会は4年生以上が応援参加しました。みんなリュックサックにお弁当を入れて、3時間くらいかけて歩きました。帰りも歩いて帰ってくるんですが、熊が出るので、父や生徒の父親達は馬に乗って何回も往復して、熊よけのラッパを吹いて私たちを守ってくれました。

島の子供達は、アブラコでもなんでも釣れるので、桟橋で釣りをしたり、海が寒流なので泳ぐことができないのですが、沼などに行って泳ぎました。遠くに行くとカッパに足を引っ張られると言って、遠くに行かないようにして皆で泳ぎました。学校の周りに松がありました。松かさの一つをはぐると堅い実が入っていて、その松の実の殻を割ると白いお米のようなものを食べました。

昭和16年12月、日本は戦争に突入しました。その1ヶ月くらい前、私の家の前が単冠湾（ひとかっぱわん）といって深い海だったと思いますが、朝起きると、軍艦が毎日増えて行って40隻以上になりました。セ

一ラ一服を着た水兵の帽子のリボンがひらひら風になびいているのを覚えています。夜になると、それぞれの軍艦から空に向かってものすごい明かりの閃光で照らしているのが目に入りました。ランプの生活しかしていなかったのに、皆びっくりして空を見上げておりました。それは敵機を探すための照明だったのではないかと思います。後から聞いた話ですけれど、択捉島の単冠湾から出て行った日本の機動部隊は、ハワイの真珠湾に向かっていったようです。初めは、日本は華々しい戦果を挙げていたようでしたが、3年8ヶ月ほど戦争が続き、敗色の濃い昭和20年8月には、アメリカが広島と長崎に原子爆弾を落として、8月15日に終戦となりました。その6日前の8月9日に、ソ連が日本に宣戦布告をしました。日本が負けることを見越しての参戦だったと思います。終戦から半月後には北方領土の島々はソ連に占領されてしまいました。ソ連軍は土足で家に入ってきて、皆、自分の家から追い出されて、物置のようなところに入れられて2年半苦労させられました。

私は、たまたま函館の方に出てきていましたけど、明治29年に、祖父が島の警備のために島に渡って50年間心血を注ぎ、開拓してきた土地なので、どんなにか無念だったと思います。それがリュック一つでどこに連れて行かれるかわからないまま引き揚げが始まりました。強制送還後、私の家族は、祖父母をはじめ両親、兄弟と一緒にすることができました。引き揚げてきた人が中心になって、返還運動を昭和40年に始めました。それから40年余り、北方領土問題は解決しておりません。日本の首相がモスクワに行って領土問題を解決するためにお話しをしたり、ソ連からも大統領が来日して領土問題の話を行っているのですけれど、未だに解決されておられません。

私も、幼くして弟を亡くしているものですから、これまで墓参に4回ほど参加しています。懐かしい村の風景、小高い丘と海と空は当時と変わらないのですけれど、一軒の家もありません。墓参に行ったときも、墓地はこの辺だったと話合って、そこで慰霊祭をしました。後から聞いた話では、墓石はパンを焼くための窯に使われたと言うことです。墓参の他にも、北方領土に住んでいるロシア人と交流事業などを行っていますが、元島民の平均年齢は78才になろうとしており、返還運動を2世、3世の皆さんに引き継いで、今後も返還運動に携わって行って欲しいと思います。これまでも、ソ連やロシアの外務大臣が来て領土問題を話し合っていますが、未だに解決をしておりません。今年の11月頃から、メドヴェージェフ大統領や政府の高官達が北方領土を訪問し、ロシアが北方領土の開発のために資金を出すような話をしているので、ますます領土返還が遠のいてしまうような気がします。2世、3世の皆さんに北方領土問題に関心を持っていただいて、返還運動に携わっていただきたいと思います。皆さんにそれをお願いして話を終わります。



## 島牧村立島牧中学校

実施日：平成 23 年 12 月 20 日（火）9:40～10:30

講 師：桜井 和子氏（択捉島出身）

桜井和子と申します。宜しくお願いします。今日は、皆さんに北方領土のことについてお話ししたいと思えます。皆さんは北方領土のことを勉強していると思いますが、北方領土は日本固有の領土です。固有というのは、古くから日本人が生活をしており、戦争などで奪った領土ではないという意味です。北方領土は祖先が、厳しい環境の中で苦労を重ね、開拓をしてきた土地なのです。

位置的に北方領土は、北海道本島の東北にあって択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島々からなっております。歴史的には、江戸幕府が1644年頃、「正保御国絵図（しょうほうくにえず）」という地図を書きましたが、その中にも択捉、国後などの名前が載っています。また、江戸幕府が調査隊を派遣して択捉島の岬に「大日本択捉」と書いた標柱を建てて、日本の領土であることを示しました。安政元年（1855年）に日本はロシアと日魯通好条約を締結し、択捉島から南が日本の領土、ウルップ島から北がロシアの領土という日ロ間の国境を決めました。

北方領土には様々な動物がおりましたが、オットセイ、トド、アザラシ、キタキツネ、エゾウサギなどがいて、また資源の豊富なところで、寒流と暖流が接しているのので、世界の三大漁場の一つと言われ、鮭、鱒、鱈、タラバガニ、花咲ガニ、ウニ、ホタテ、昆布、海苔など様々な水産物が豊富でした。鯨も捕れましたので、捕鯨場のほか缶詰工場、孵化場などがあり、私は択捉島の年萌（としもえ）というところで生まれましたので、子供ながらに昆布、海苔などで生活していけるのだなあという思いをしていました。

小学校の思い出として、1年生から6年生まで44人で教室は一つで、校長先生が一人、そんな忙しい校長先生を見て、先生の資格を取って、先生のお手伝いをしたいという思いで島を出ました。

捕鯨船は鯨が捕れると長い汽笛を3回ほど鳴らして、港に入ってくるので、村人は浜に行行ってその様子を見ていました。太い鉄のロープが鯨のしっぽに巻かれて太い棒の先に大きな刃をつけて鯨の解体を行っていました。必ずといっていいほど、解体をした人が脂肪の下にある霜降りのおいしい肉を20センチ角ぐらいに切ってくれて持ち帰りました。また、隣村の運動会には、必ず応援参加するので4年生以上15人くらいでお弁当を持ってリュックを背負って14キロの道のりを3時間くらいかけて皆で参加しました。帰りもまた、14キロの道のりを戻ることになるのですが、途中熊が出ますので、父が馬に乗ってラッパを吹いて守ってくれておりました。島は寒流が流れており泳ぐことができないので、河で泳いだり、栈橋で釣りをした時は、大きなアブラコがたくさん釣れました。そういう思い出がたくさんあります。

昭和16年12月8日、日本は世界を相手に戦争を始めました。この2週間前くらいに私の家の前が単冠湾（ひとかっぱわん）といって深い湾だったのですが、朝起きると日本の軍艦が次々に湾に集まってきて、40隻以上の軍艦が湾いっぱい集まっておりました。海軍の軍人さんは、セーラー服を着て帽子のリボンを風になびかせながら、手旗信号で交信しておりました。夜には、数隻の軍艦から、サーチライトで空に向かって幾筋もの光が放たれており、ランプの生活をしていましたものから、サーチライトの不夜城のような光に皆驚いて空を見ておりました。出港するときは次々にいなくなって一隻もいなくなりましたが、日本の軍艦は、この単冠湾からアメリカの真珠湾に向かったようです。島の人たちは、電気、ガス、水道など全くありませんでしたが、不自由さなど感じないで、皆で仲良く平和に暮らしておりました。

最初は日本軍の華々しい戦果で、シンガポール占領のニュースなどを聞いて地図に印をつけておりました。

だんだん雲行きが怪しくなり、アメリカが広島、長崎に原子爆弾を投下して、終戦を迎えました。終戦の6日前（8月9日）に、ソ連が日本に宣戦布告をしました。原爆の投下などによって日本に勝ち目のない状態での宣戦布告だったと思います。8月末にソ連軍が択捉島に進駐してきた。島の人たちは、アメリカの軍隊が入ってくると思っていたのですけれど、ソ連軍だったので驚いていました。私の家も「駅通（えきてい）」といって人や馬を世話する宿をやっていたのですけれど、ソ連軍が郵便局に入ってきて、通信機械などを破壊しました。そして、旅館の方にも土足で上がってきて略奪されました。交通機関がほとんど馬なので、50頭ほどの馬も全部取り上げられてしまいました。私の祖父も明治29年に北方警備という名目で択捉島に渡り、50年余り厳しい環境の中で暮らし、それまで資産も作ったのですけれどすべて失ってしまいました。択捉島にも「暁部隊」という日本の兵隊さんがたくさん入っていたのですけれど、ソ連によって武装解除され、その後シベリアに連れて行かれたそうです。兵隊さんは、内地に帰ったらということで、私の両親に手紙を預けていったようです。私の家族も家から追い出されて、浜のそばの物置に入れられて苦しい生活を2年近く送ったようです。私は小学校5年生の時に函館に一人来て来ていましたから、その当時の苦労話は、家族が引き揚げてきてからの話です。よく聞かされました。8月15日終戦の一月前、7月14日、15日と函館空襲があり、数百人の死者が出ました。私の両親も函館空襲のニュースを知って、両親から「無事か」「変わりないか」と電報が来て、返信の電報を打つために何度も郵便局に来たのですけれど、こちらからの電報は引き受けてもらえないので、涙を流して帰ってきたこともあります。

引き揚げるときも、ソ連軍が、突然船に乗れということで皆、着のみ着のままに船に乗ったそうです。私の祖父も50年間で築き上げた物を総て失ってリュック一つで樺太を経由して帰って来ました。丁度その頃、シベリアからの引き上げ船があったそうです。引き揚げて函館に着いたとき、父が進駐軍に私のことを聞いたようで、当時高校1年生だったのですが、学校まで進駐軍が来て私の無事を確認したみたいです。この頃、進駐軍の本部の前を通ってはいけなとか、通学路まで変更されたり、進駐軍と目と目があってはいけなという学校からの指示があったのですが、日本人の2世の進駐軍の人が、「お父さんも、お母さんも、皆無事に帰ってきましたよ」と言う言葉を聞いて安心して、友達と二人、函館の岩壁に「白龍丸」を探しに行きましたが、進駐軍の人が何か言っていたのですが分からなかったのので、援護局の人に聞いたら、「白龍丸」の人たちは岩壁に横付けされている大きな船に乗り換えているから、呼んできてあげると言われ、それから間もなく甲板の上に母、祖父母、兄弟皆の顔を見つけることができました。その時、もう今日からは一人でないんだという気持ちで喜びで胸がいっぱいになりました。あの嬉しさは一生に一度の思い出だと思います。母は、魔法瓶に大事な写真や兵隊さんから受け取った手紙などを詰めて持ってきました。

引き揚げてきた元島民達も、平均年齢が78才近くになって、長い間返還要求運動を行ってきましたけれど、未だに領土問題の解決の道はついておりません。ロシアの大統領も来日して、その都度この問題が話題になりますけれど、解決の道はついておりません。昨年11月には、メドヴェージェフ・ロシア大統領が国後島を訪問し、その後、ロシア政府の要人の北方領土への訪問も相次いでおり、領土返還がだんだん遠のいていくような気がしています。日本の首相もモスクワ入りして、領土問題が話題になるのですが、未だに解決の道はついておりません。

昭和30年代から墓参事業が行われており、これまでに5回参加いたしました。最初行ったとき、墓石がなくなつただけ小高い丘のようなところしかなかったのですけれど、聞くところによると、墓石はパン焼き釜に使われてしまって一つも残ってないということでした。現在、毎年ピザなし交流など北方領土に住んでいるロシア人島民との交流が続けられていますが、領土問題の解決には至っておりません。

元島民が高齢ですから、これから返還運動に携わっていくのは、皆さん方や2世、3世の方達になりますので、皆さん方には北方領土問題について関心を持ってもらうことが大切です。今後、返還運動を粘り強く行

って行くためには、皆さん方の力に期待したいと思います。

